

空想傾向がポジティブに働くための環境要因の検討

— 「居場所」の心理的機能が与える影響の検討 —

山 田 耕 平

創造性の先行研究について、本人の特性に着目したものはいくつもあるが、周囲の環境との関連から調査したものは非常に少ない。清水（2019）によると、これまでの創造性の研究は個人の hochi認知機能や特性に焦点をあてたものが行われてきた。近年では、創造性を個人・環境・社会との関係の中から生じるものととらえて検証する試みも徐々に営まれつつある。本研究は、その流れの一環として個人が創造性を発揮しやすくなるような環境を明らかにしようとするものである。本研究では空想傾向と環境としての居場所感、創造性の関連を検討することを目的とする。

大学生209名を対象に質問紙調査を行った。調査には「創造性尺度」「空想傾向尺度（CEQ-J）」「居場所感尺度」の3つの尺度の質問項目で構成された質問紙を使用した。上記の3つの尺度について質問項目にどの程度当てはまるか「あてはまらない」から「あてはまる」まで5件法で回答を求めた。「創造性尺度」には【挑戦性・探究心】【積極性・自信】【持続性・集中力】【独自性】【好奇心】【柔軟性】の6つの下位尺度からなり、「CEQ-J」は【異常な体験】【空想の鮮やかさ】【子どものころの体験】の3つの下位尺度からなり、「居場所感尺度」は【自己有用感】【本来感】の2つの下位尺度からなる。

空想傾向の下位尺度と居場所感の違いによって、創造性の下位尺度に差が出るか検討をおこなった。空想傾向の下位尺度と居場所感を平均値から $\pm 0.5SD$ を基準として、それぞれ高群と低群に分類した。空想傾向の下位尺度（高群・低群）と居場所感（高群・低群）を独立変数、創造性の下位尺度を従属変数として2×2の分散分析をおこなった。分析の結果、空想傾向の下位尺度が居場所感の効果を打ち消すような働きをしていることが示唆された。一方で、居場所感の主効果は見られるので、これらの空想傾向の下位尺度が高い人にとっても居場所感は創造性を発揮するうえで重要な要因であると考えられる。つまり人が創造性を発揮するためには、居場所感のある場所、つまり良好な対人関係が構築出来ていて、自分が役に立っていると感じられる、ありのままの自分が出せるような場所を提供することが臨床的に必要なことだと考えられる。本研究によって、居場所感と空想傾向、創造性の関連が示され、とりわけ空想傾向の低い者にとっては、創造性を発揮するうえで居場所感が重要だということが示唆されたといえる。今後の課題として、空想傾向の低い者にとっては居場所感が重要な働きをすることがわかったものの、当初の目的であった空想傾向の高い者が、創造性を発揮するために必要な要因については十分な示唆は得られなかった。この点について、空想傾向の高い者が創造性を発揮するための外的な要因について考察を深めることが臨床的に必要なことだと筆者は考えている。